

# Climate Change: An Archaeological Study

## How Our Prehistoric Ancestors Responded to Global Warming

John D. Grainger 著, Pen and Sword Books 発行

(出版年月) 2020 年 12 月, 288 pp. 定価 3,628 円 (税込)

地球温暖化は我々が直面する大きな課題である。しかし、約 1 万年前から始まった退氷期において、我々の祖先はその数倍の規模の温暖化を体験し、生き延び、その結果として今日の我々がある。祖先はどのようにして温暖化に対処したのか、末裔である我々はそれを知りたいと思う。本書はそれを考古学的証拠に基づいて物語る。

現在、北アフリカや中東から、多くの人々、しかも家族連れが、ヨーロッパを目指して移動する姿をニュース番組などでよく見かける。ヨーロッパの人々は、不本意ながらもそれを受け入れている。日本人には信じがたい光景である。彼らと我々はどこが違うのだろうか。

筆者は、本書を読んで、遅ればせながら納得できた気がする。本書では、古代のヒトを、食糧を求めて移動する狩猟・採集者と、定住して食糧を集める採餌者に区別し、ヨーロッパ人を前者、日本人を後者の代表例として取り上げる。

ヨーロッパ人の祖先は、退氷期において、生き残るための大きな選択を強いられた。獲物を追って生きることこだわる(本書の著者によれば保守的な)彼らにとって、移動はもっとも基本的な対処方法であった。

かたや日本人は、氷河期を意識しないで生きてきた。たとえば、中央公論社の「日本の古代」(全 15 巻)では、第 1 巻「倭人の登場」(森 浩一, 1985)の冒頭がこの時代に相当するが、「氷河期」にも「退氷期」にも触れていない。西洋の古代史は氷河期ぬきでは語れないが、定住して、海の恵みと山の恵みを享受できる採餌者の国だった日本は、退氷期の異民族の移動に巻き込まれることもなかった。

これらの違いは、数千年を経た今でも、その民族性に残っていると感じる。

退氷期の温暖化の対処策としての祖先の最大の発明は農業である。農業は、世界のあちこちで、ほぼ独立して始まったが、時期的にもっとも早かったのは、アラビア半島北部の、いわゆる「肥沃な三日月地帯」と言われている。しかし本書の著者は、それは考古学者が作り出した「人工遺物」であると断じ、正しくは、メソポタミアを除くレヴァント(イスラエルからトルコ東部にかけての地中海沿岸地帯)であるという。退氷期の温暖化により、レヴァントの降水量が増えたことが主因であり、メソポタミアはチグリス・ユーフラテス川からの灌漑が行われるようになって初めて農業が可能になったという。農業と気候の強い関係を改めて感じさせる。

本書は、農業と気候の関係を研究対象とする農業気象の技術者や研究者にとって、研究視野を広げる良書と思われる。一読をお勧めしたい。

本書の構成は次のようになっている。

### Introduction

Prologue: The First Australians

Chapter 1: The Ice Age

Chapter 2: Following the Ice

Chapter 3: Escaping the Ice

Chapter 4: Floods and Fish

Chapter 5: Sedentary Foraging

Chapter 6: Drought

Chapter 7: Agriculture

### Conclusion

各章末には、Gallery として、関連する写真が展示されている。

(小林哲夫, 本会フェロー)